

青森県知事

みむら ひと 三村 申吾



私の視点 ● 点 ● いま自治体で

明治初期に来日した英国

の女性旅行家イザベラ・バードは、東北地方の農村風景の美しさに驚嘆したという。だが、その美しさと機能が今、急激に失われ始めている。

水田風景に代表される田園空間や里地・里山は、農林水産活動を通じて自然への持続的な働きかけによって形成された人為的、二次的自然であり、人間活動と自然との絶妙のバランスの上に成り立っている。

しかし、地方の生産現場では過疎化・高齢化が急激

に進行しており、その維持管理の力が極端に弱まっている。こうした空間を、公共の社会資本として次世代に継承していく取り組みが今求められているのではないか。

青森県では私自らが「環境公共」という概念を創造・提唱し、その言葉によっ

て予算付けをし、コンサルタントが設計を行い、建設会社がその設計に基づき建設工事を受け持つという従来型の公共事業ではなく、協業・総合型の「新しい公共事業」のスタイルで実現していきたいと考えている。

具体的には、岩木川水系

域の企業やNPO法人など、地域の様々な主体がその知恵と技術を組み合わせながらつくり上げていく手法を検討している。ある意味で江戸時代まで行われていた「皆に必要なものを皆でつくる」という「公共事業」の原型に通ずる手法である。もちろん、

共事業費が大幅に減少している。だが、その過程では削減ありきの議論が多く、将来に向け整備すべき社会資本とは何かについての議論が不足していたように思える。

財政の論理だけが先行し、環境を下支えしている農林水産基盤への配慮がおろそかになるなら、日本の国土は鬆だらけの、貧弱な姿をさらすことになりかねない。「角を矯めて牛を殺す」ような近視眼的な考え方は、バード女史がアルカディア（理想郷）とも評した「美しい国へ」の道を様々な意味で閉ざしてしまうのではないか。

◆ 公共投資 「環境公共」の理念持とろ

て、環境とそれを支える農林水産業を一体としてとらえる公共投資の重要性を強くアピールしている。

食料生産の大本は清純な水であり、「山・川・海をつなぐ水循環システム」を健全な状態で整え、守るところこそが基本中の基本である。県ではその水循環システムを、行政が計画を策定

など県内6水系を対象エリアとして水循環の各段階ごとに上流の林野整備、中流の農業農村整備・畜産振興、そして下流の漁港漁場整備などの農林水産公共事業を、本県に豊富に存する木炭やホタテ貝殻、間伐材、等々の地域資源を最大限に活用しつつ、さらには子供を含めた地域住民、地

域の企業やNPO法人など、地域の様々な主体がその知恵と技術を組み合わせながらつくり上げていく手法を検討している。ある意味で江戸時代まで行われていた「皆に必要なものを皆でつくる」という「公共事業」の原型に通ずる手法である。もちろん、

共事業費が大幅に減少している。だが、その過程では削減ありきの議論が多く、将来に向け整備すべき社会資本とは何かについての議論が不足していたように思える。

財政の論理だけが先行し、環境を下支えしている農林水産基盤への配慮がおろそかになるなら、日本の国土は鬆だらけの、貧弱な姿をさらすことになりかねない。「角を矯めて牛を殺す」ような近視眼的な考え方は、バード女史がアルカディア（理想郷）とも評した「美しい国へ」の道を様々な意味で閉ざしてしまうのではないか。

投稿は、〒104・8011朝日新聞企画報道部「私の視点」かstien@ashi.comへ。本社電子メディアにも収録します。